

Researcher's Notes

憧れの働くママになるために

調査マン手帳



私事だが、学生の頃から、将来は結婚して子どもを育てながら仕事も続けたいと考えている。今でもその夢は変わっていないが、社会人4年目の今、本当に実現できるのか不安に感じている。というのも、4月から人生初めての一人暮らしを始め、家事の大変さを痛感したからである。仕事に疲れて帰宅した後、料理に洗濯、掃除…。ネイルはすぐに剥げるし、手も荒れる。あっという間に1日が過ぎて、すぐに翌朝を迎える。子どもを産めば、子どもの世話もしなければいけない。そう考えると、不安が募る。

このように現代社会では、仕事と子育てや老親の介護との両立に悩み、とくに女性は離職に迫られるケースが多くみられる。折しも、当会ではワーク・ライフ・バランス（WLB）の調査研究を行っている。WLBとは、誰もが置かれた状況に応じて柔軟な働き方を選択できる社会を目指そうというものである。ところが、WLBの意味は知っていても、業績改善が最優先でWLBの充実は二の次だと思っている方も多いのではないか。

実は、WLBは業績改善の一助となりうる。すでにこの考え方を上手に取り入れ、社員のモチベーションを向上させたり、優秀な人材を定着させたりすることで、業績アップにつながっている企業も出てきている。WLBは企業にも利益をもたらしているようだ。

医療法人寿芳会芳野病院（北九州市）がその例であり、（公財）日本生産性本部（東京都）が毎年行っているWLB大賞で第6回優秀賞を受賞している。同病院では、さまざまな取組を行っているが、なかでも育休制度の奨励に力を入れている。制度自体は目新しいものではないが、同病院の特徴は、制度がきちんと活用され、形骸化されていない点である。現場の業務の一部をマニュアル化し、引継ぎにかかる労力を軽減したり、誰もが対応できるようにしたりするなど、さまざまな工夫を行った。その結果、ほとんどの従業員がこの制度を利用しており、好評を得ている。院長によると、キャリアを積んだ女性が出産などで辞めることは病院にとっても損失で、優秀なベテラン従業員を雇い続けることが、経験豊富な従業員の確保やコスト削減につながっているという。子どもを産んでも働き続けることができるということは、従業員と病院双方がメリットを得るのである。

しかし、九州の多くの企業の現状はというと、実態はなかなか厳しいようである。厚生労働省の「毎月勤労統計調査」をみると、九州全体の総実労働時間が全国値を上回っている。この労働時間が九州の経済を支えてきたのかもしれないが、さらに九州が発展する手段として、WLBを取り入れてみるのはどうだろうか。個人にとっては、仕事と生活の両立によって生きがい生まれ、企業にあっては、生産性の向上、優秀な人材の確保につながり、さらに、社会全体にとっては、子育て、介護や地域活動と仕事の両立が可能となることで、出生率の向上や住民の社会参加にもつながる。

今はまだ慣れない仕事と家事を必死にこなす日々だが、WLBの調査を契機に、「工夫次第で仕事と家庭は両立できる」と確信した。いつかは私も憧れの働くママになろうと思う。

（田中 沙季）